研究ノート

口述筆記というケア労働
——谷崎潤一郎と筆記者・伊吹和子の事例を中心に

田村美由紀

1．はじめに

文学作品がそれを生み出した作家個人の占有物で無いことは、既に自明の事実である。小説制作を捉える位相が、ロマン主義的な〈創造〉からマルクス主義的な〈生産〉の概念へとシフトする中で、文学を文学として成立させるシステムへの注目が高まり、テクストの生産・流通・受容を可能にする社会的条件や文学場の構造そのものが問い直された[1]。こうした視座のもと、編集者や翻訳者、校正者、装丁家、書店員など様々な職種によって編成されるネットワークの具体相が徐々に明らかになりつつある。

しかしながら、こうして作家の単独性が解体されていく一方で、その創作現場を不可知の空間として神聖化する読者の心性は未だ衰えていないのではないだろうか。近代小説は均質な活字テクストの背後に「書くという行為の生々しい肉感性」を捨象することで成立している[2]。それは翻って、創作過程の実態を留める草稿に対するわたしたちの興味を惹起させ、インクの濃淡や特徴的な筆跡といった書記行為の痕跡や、推敲のプロセスそれ自体に高い芸術的価値を見出す受容態度を生むことにも繋がった。テクストに冠された作家の固有名と自ら筆やペンを手に執って白紙の原稿用紙に対峙する書き手のイメージは自然と重ねられ、作家の創作現場を想起する際の暗黙の前提とされている。しかし、書く主体としての作家像を無意識に想定することによって見落とされてしまうのは、作家の代わりに文字を書き留めていった口述筆記者とい

う〈もう一人の書き手〉の姿である。

本稿が取り上げるのは、作家の執筆行為を第三者が代行するという形態、すなわち口述筆記によっておこなわれる小説制作の問題である。ただし、生成論的アプローチに基づいて実際に口述筆記された草稿類を分析し、その創作過程や筆記者の介入の程度を詳らかにすることを目指すものではない。ここで問題にしたいのは、口述者と筆記者との間の主従関係によって生じる葛藤と、口述筆記という形態が不可避的に孕む抑圧の構造である。本稿では、こうした問題の輪郭を明確にするため、口述筆記をケアの論理と接続させて捉えることを試みる。むろん口述筆記が採用される理由は様々であり、口語文体の創出といった目的からそれを意図的に利用する作家もいる。[3] しかし、ここでは視力の衰えや書痙を患うなど、何らかの身体的な不調が原因で物理的に筆を執ることが困難となった場合に焦点を当てる。不自由な身体を抱えた作家の創作活動を支え、小説制作の根本にある書記行為を介助する役割を担っている点において、口述筆記とはまさしくケア労働の一種である。

ケアとは育児や看護、介護、看取りなど、身体的・精神的に他者に依存せざるを得ない弱者に対して配慮することや世話することを指し示す概念である。[4] 人間の生の営みとは決して切り離せず、家族や共同体の維持に不可欠なケアは、それを女性が担うべき役割として固着させ、公的領域から排除する近代社会の構成原理のうえに成り立ってきた。こうしたケアの論理が、公的領域と私的領域の分断やそれを温存する既存のジェンダー秩序に対する批判的再考を促す思想として近年注目を集めていることは周知の通りである。[5] 公的領域における自律した主体概念と密接に絡みついた形で周縁化されるケア労働の問題は、作家の有名性の陰でシャドウワークとして扱われてきた口述筆記者（その多くは女性であった）の営為にも敷衍することが可能だろう。作家の創作活動を媒介する種々のファクターについて検証が進められてきたことは冒頭で述べた通りだが、口述筆記のように作家を身体的なレベルでサポートする女性たちの存在は、それがケア役割と類同性を持つにもかかわらず、あるいは持つがゆえに、これまで議論の埒外に置かれてきたといってよい。

本稿は、こうした近代作家たちを取り巻くケア労働の問題を、口述筆記という創作形態を通して考察する。まず、作家という職業において公的領域と私的領域との境界確定がいかにおこなわれているのかを確認し、口述筆記者が不可視化される構造をケアの論理と重ねて整理する。そのうえで、実際に谷崎潤一郎の口述筆記者を務めた伊吹和子（一九二九年―二〇一五年）の証言を手がかりとして、口述者と筆記者との交渉の現場に迫ってみたい。口述筆記については、創作の舞台裏を明かす事実として言及されるこ

とはあるが、多くの場合、それは創作手法の変化が文学実践へいかなる影響を及ぼしたのかという男性作家側の論点に収斂されられてきた。[6] ケアという枠組みを導入することは、こうした男性中心主義的な文学場の評価構造を再考するためにも有効であると考えられる。口述筆記創作をケアの営みとして捉えることを通して、口述者と筆記者の間の関係性の力学とその倫理性をジェンダーの視角から問い直すことが本稿の目的である。

2．作家の労働空間と見えない口述筆記者たち

作家の労働形態は特殊である。まずは、その特殊性を公／私に二分される近代の空間配置のポリティクスを確認しながら素描しておきたい。近代資本主義社会における家族イデオロギーは、〈公的領域―市場―有償労働〉と〈私的領域―家族―無償労働〉という位階構造に基づいて編成されている。こうした二元論的図式のなかで、男性は生産を担う前者に、女性は再生産を担う後者へとそれぞれ割り振られる。こうした公的領域と私的領域の分離とそれに基づいて構築された非対称なジェンダー・システムが、性別役割分業の固定化を招いてきたことは、もはや繰り返すまでもないだろう。[7]

しかし、作家という職業[8]を考えてみると、こうした公／私の切り分けが必ずしも截然とおこなわれているとは限らない。例えば、作家が原稿執筆をおこなうのは、本来経済活動とは切り離された私的領域＝〈家庭〉であることがほとんどである。その意味で、作家にとっての〈家庭〉は私的な空間でありながら、収入を得る手段としての小説制作をおこなう労働空間でもあるという重層性を帯びることになる。公／私の領域が混じり合うのは、単に労働する〈場所〉の問題に限ったことではない。作家の生活態度や夫婦関係など私生活に関する情報が参照すべき解釈コードとして機能し、読者の〈私小説〉的な読みの態度を誘発していったことを想起すればわかるように、作家の私的領域はメディアを通して公に発信されることで、読者の興味関心を掻き立て、小説の解釈を外部から支えるパラテクストの一つとなった。作家の私生活はメディア上に流通する作家イメージの形成に影響を与え、それ自体が小説の受容という市場の動向に還元される公的領域の一部となっている。このように公的領域と私的領域との境界が融解し、互いの領域を巻き込み合う形で労働空間が形成されている点に、近代における作家という職業の特徴が垣間みえるのだ。

口述筆記というケア労働が不可視化される要因も、こうした作家の労働空間の重層性に探ることができるだろう。そもそも、口述筆記者は編集者や翻訳者などと異なり、音声と文字のあいだを架橋する透明な媒体として振舞うことを求められる匿名化された

存在である。書記行為の代行という職務の性質上その名が前面に出ることはタブー視されるが、それ以上に影響するのは、先述した作家の労働形態の問題である。身体的な制約で自ら書くことができない作家にとって、筆記者の介助がなければ小説制作は成り立たない。その意味で、口述筆記は作家の有償労働（執筆行為）に直接関与する仕事でありながら、同時に私的領域＝〈家庭〉内におけるケア労働でもあるという両義性を孕んでいるのだ。しかし、こうした口述筆記の両義性がこれまで明確に認識されてきたとは言い難い。ここには、育児や介護といったケア労働を私的領域に囲いこむことで女性に委ね、シャドウワークとして不可視化してきた家父長制的構造と軌を一にする問題を指摘することができる。

ただし、こうした事態とは対照的に、口述筆記がケアの営みとして前景化される場合がある。本稿が分析の中心に据える〈男性作家―女性筆記者〉というジェンダー構成が反転する事例、例えば大庭みな子や三浦綾子のように男性（夫）が女性作家の口述筆記に携わった場合である。一九九六年に脳梗塞で倒れた大庭みな子の夫・利雄の日記には、後遺症を患うみな子の身体的なケアと口述筆記の様子が連続性を持って記されている。[9] なおかつ、利雄はこうした介護の経験が通常の夫婦や男女の関係性を越えていく可能性をもつものであると肯定的に受け止めている。[10] また、『氷点』や『塩狩峠』などキリスト教文学で知られる三浦綾子も夫・光世の協力によって創作を続けた作家の一人であるが、「書くことはあっても、書く身体がないんです」と苦悩する綾子に終始寄り添った光世の介護者としての関わりは、多くのメディアにも取り上げられている。[11] 男性筆記者のサポートはそれだけで通常の関係性との転倒が生じているがゆえに、評価の対象に浮上しやすく、ケアの物語に枠づけて解釈されやすい。いわば、ここには口述筆記のジェンダー構成をめぐる評価の二極化が生じているのである。女性の筆記者は、作家の補助的役割であるという口述筆記者の立場性と、女性の役割として自明視されているがゆえにケアの物語にも積極的に自己投影することが困難であるという、二重の不可視化を被ってきたのだ。

なおかつケアの論理は、近代社会において標準化されている自律的な主体幻想を批判し、人間の脆弱性や他者への依存を基盤とした主体のあり方を積極的に呼び込むものである。そこで想定される自律的な主体とは、とりわけ知識層の成人男性を構成員として措定されたモデルであった。したがって、知的エリートであり、秀でた芸術的才能が認められてきた一般的な男性作家は自律的な主体概念と親和性を有しているがゆえに、ケアを受ける脆弱な主体として顧みられることが少なかったともいえるだろう。もちろん作家もひとりの人間である以上、他者に依存して暮らさざるを得ないのは当然なのだが、作家自身がケアの当事者になりうると

いう認識には容易に結びつかない。なにより、作家自身がそうした自律した主体であるというステレオタイプな自己イメージに縛られていたといってよい。例えば、本稿で事例として取り上げる谷崎潤一郎は、晩年に発表された随筆で次のような言葉を残している。

「小説家であることの幸福」と云ふやうなエッセイを、私はときどき書きたくなる。全く他人と没交渉で仕事が出来、自分だけの世界に閉ぢ籠つてゐられる有難さは、たゞひとり小説家のみが享受できる。私は家庭の中にあつても妻や妻の一族に窺ひ知られない孤独な世界を持ち、いつでも気が向けばそこに逃げ込んで籠城し、子供が好きな人形を並べて楽しむやうに、数々の幻想の人形を並べて何人の掣肘を受けることなく自由な時を過すことが出来るのは、ひとり小説家のみに許された特権であると考へてゐる。私はもうこの孤独な世界から、一歩も外へ歩み出さうとは考へない。[12]

一九六三年、すでに谷崎が口述筆記による創作に移行していた頃に書かれた（口述された）この随筆から看取されるのは、書斎を日常の些事と切り離された〈聖域〉とみなし、その閉鎖的な空間のなかでのみ孤高の小説家であることができるという谷崎の自己認識である。むしろ、既に谷崎にとっての創作現場は閉ざされた〈聖域〉などではありえず、ケアと依存の空間に変容していたがゆえに、誰とも接触せず、それゆえ誰の手も借りずに、あくまで独力で創作活動に没頭する小説家像が強く理想化されていたとも解しうるだろう。晩年の小説『瘋癲老人日記』（一九六二年）には、自身と同じく手に痛みを患う卯木老人を登場させ、当時の看護記録などを作中に取り込んでいるが、谷崎は老人が痛めた手だけは実際とは逆の左手という設定に変更し、執筆に必要な右手を庇うことで、老人が自ら日記を書くことに執着するという展開に拘りをみせていた。[13] このことからも、谷崎が自らの手で書くという理想に対する欲求を、テクストに仮託していた様がうかがえよう。

もちろん先述のように、作家の私生活がひとつのパラテクストとしてメディア上に流通している状況に鑑みれば、口述筆記による創作がおこなわれていることが読者に対して完全に秘匿されているわけではない。ただし、こうした創作の楽屋裏を明かす情報は既存の作家イメージを損なわない形で提示される。谷崎の場合も、当時の雑誌や新聞の記事に執筆現場を取材したものがしばしば見受けられるが、多くは谷崎が右手を患ってからの創作の苦悩や、肉体的な苦痛に耐えてなお創作に意欲を燃やし続ける作家の執念を取り上げたものであり、[14] 筆記者の貢献は記事の上では後景化されているのだ。

では女性筆記者たちは、公的な小説制作の手段でありながら私的なケア労働でもあるという口述筆記の両義性をいかに引き受け、その現場でいかに格闘してきたのだろうか。次節では、谷崎潤一郎の口述筆記者であった伊吹和子を事例に、その諸相を具体的に検討していきたい。

3．口述者と筆記者との交渉

伊吹が初めて谷崎の口述筆記者を務めたのは一九五三年五月、一九五一年五月から刊行が開始されていた『潤一郎新譯源氏物語』全十二巻の執筆も中盤に差し掛かった頃であった。[15] 当時伊吹は、谷崎の訳業を専門的知見からサポートしていた玉上琢弥らが所属する京都大学文学部国語学国文学研究室に勤務しており、旧仮名遣いを習得していることとその文学的素養を見込まれての抜擢であった。その後中央公論社の社員となった伊吹は、全篇口述筆記による最初の創作となった「夢の浮橋」（一九五九年）以降、ほとんどの作品で口述筆記を担当することとなる。

こうした口述筆記の経験については、谷崎が「高血圧症の思ひ出」（一九五九年）などの随筆で当時の心境を明かしているほか、伊吹の回想記『われよりほかに』（講談社、一九九四年）[16] を通してその実態を知ることが可能である。しかしながら、従来この回想記は、晩年の谷崎の伝記的事実を補完する資料として参照されるにとどまっていた。本書出版時の書評には、伊吹和子という秘書の目を通して描かれた「谷崎の素顔」という評言が散見され、文豪の知られざる相貌を浮き彫りにする貴重な証言としては概ね高い評価を得ているものの、[17] 口述筆記者としての伊吹の創作現場への関わりやその仕事ぶりに対する関心は稀薄であったことがうかがえる。[18] したがって、ここでは伊吹の語りを谷崎という作家像の形成に帰結させるような評価の枠組みから離れ、彼女の筆記者としての振る舞い自体に目を向ける。伊吹が筆記者として口述者（谷崎）といかに対峙していたのか、またその経験をどのように語り、意味づけているのかに着目しながら『われよりほかに』の記述を読み解いていくことで、摩擦や軋轢も含めた両者の交渉の動態を抽出してみたい。

回想記のなかで繰り返し強調されるのは、口述筆記者という役割に対する伊吹の自己認識と周囲の評価との乖離である。

> 私が一番残念なのは、誰でも皆私を「先生のお気に入り」だと思っていて、そう言えば私が喜ぶと思っている。誰も「あなたの努力や勉強が役に立った」と言ってはくれないことである。「お気に入り」になるかどうかは、いわばムシが好くか否かの問題だから、運さえよければ努力も知識も必要ない。

私は先生の「お気に入り」だと言われるたびに、嬉しいどころか、ひどく侮辱されたような気持になる。先生のムシとは関係なく、憚りながら自分の努力が先生の役に立ったから、停滞していた『新譯』が仕上げられたのだ、私にしか出来ないことだったのだ、と思いたい。（九九―一〇〇頁）

筆記者の主な役目は書記行為の代行だが、それは単に口述者の言葉を文字に置き換えて写し取るという単純作業を意味するのではない。用字用語の知識はもちろん、作家の要求に応じて表記を書き分ける能力や文学の専門的知識が必要とされる場合もある。[19] 加えて、口述者の機嫌や心情を察知し、その場に見合った適切な言動を期待されるという、いわゆる〈感情労働〉[20]が求められていたことも示唆されている。[21] このように、筆記者は緊張や忍耐といった精神的負荷と隣り合わせの環境で口述者と対峙していたのだ。

しかしながら、右の引用が示すように、伊吹に対する賛辞はそうした筆記者としての技術的なスキルよりも、むしろ谷崎の「お気に入り」というポジションを獲得していた点に対する評価に偏向するものだったという。こうした評価のバイアスに、筆記者の職能についての言明を避けることで作家の主体性を担保しつつ、評価の対象を好みや相性といった偶発的な要素にすり替えることによって、筆記者の役割を矮小化する巧妙な力学が働いていることは明らかだろう。筆記者の仕事ぶりを語る際にその専門性や勤勉さへの評価が排除される事態が生じるのは、創作の現場に深く介入せざるをえない筆記者の立場が、作家の能動性や自律性を脅かしかねないある種の不穏さを孕んでいるからにほかならない。

ヘンリー・ジェイムズと彼の口述筆記創作に関わった女性秘書、セオドラ・ボサンクェットとの関係性を検討した新田啓子は、彼が自身の筆記者に「若い女性」を所望していた事実を踏まえたうえで「口述筆記という作業が、作家の創意の結晶である言葉を他者に託すことである以上、その領有への不安が生じる場である」がゆえに、「「従順」な若い女性であったなら、男性に増して、より「害なき」存在に違いないという理解」がなされていたという鋭い指摘をおこなっている。[22] ジェイムズ同様、谷崎も口述筆記者に女性を求めていたことが伊吹の証言によって明かされているが、[23] ここに創作のパートナーとして女性をあてがうことで、自身の作家としての領分に対する干渉を極力封じようとする男性作家の思惑を透かしみることは容易だろう。ジェンダーの階層秩序において絶対的に非対称な関係にある女性を配置することによって、男性作家は自身の威厳や優位性を全く損なうことなく創作を続けることができる。[24] 仮にその女性が筆記者として卓越した能力を有し、大きな貢献を果たしていたとしても、彼女が取り立てられる理由

は、女性的な魅力や属性（従順さ、温和さなど）、作家との人格的相性によるものだと即断される。つまり、物理的には作家の側でその創作活動の一端を担っていたとしても、筆記者が〈ペンの代用品〉というその職務を逸脱して、芸術上のヒエラルキーを踏み越えることは決して許さない構造がここには用意されているのである。

ことさらに筆記者の女性性を中心化する評価の言説は、作家と筆記者との間にセクシュアルな関係を想像し、それによって筆記者を揶揄する誹謗中傷へと簡単に横滑りしていく。[25] 伊吹が回想記のなかで極めて露骨な性差別的発言に遭遇したと述べていることも、[26] この事実を裏打ちするものだろう。ただし、こうした作家と筆記者との対幻想は、筆記者の存在の矮小化を図るための口実として仮構されていただけではない。伊吹は、谷崎の筆記者に対する意識の背後に淫靡な想像を許す要因があったと同時に、女性筆記者の側にもそうした作家の欲望を内面化する向きがあったのではないかと推察している。[27] 谷崎は若い女性の秘書兼筆記者を度々募っていたものの長続きする人が少なく、人材探しに日々頭を悩ませていたというが、伊吹はその原因を、谷崎が自身の有名性に触発されて志願してくる女性たちの憧憬の感情を逆手に取って「秘書」という名目の〝女の子〟に、多分に情緒的な慰めを期待しておられた」（一六六頁）ことにみている。つまり、谷崎は女性たちに筆記者としてのスキルに加えて、男性作家を身体／精神の両面から支える献身的な役割を求めていたのだが、[28] そうした筆記者に対する高度な要求と、「書斎用の気楽な女の子」（一七一頁）としての期待との間に折り合いがつかず、事あるごとに新入りの筆記者を解雇していく事態に繋がったのではないかと推測されているのだ。

そんな中、伊吹は多少の中断を含みつつも、約一二年間にわたって筆記者を務めてきた。彼女は谷崎との関係について周囲から誤解を受ける苦悩や、それを直接弁明できないもどかしさに直面しながらも、口述筆記という仕事にどのように向き合っていたのだろうか。それを知る手がかりとなるのが回想記のなかに度々現れる〈書く機械〉という自己認識である。伊吹は自らの立場を非人格化した無機質なライティング・マシーンに重ね合わせているのだ。こうした意思や感情を一切排除した〈書く機械〉としての自己認識は、ともすれば谷崎という男性作家に対して完全に従属するような態度表明にも映り兼ねない。しかし、伊吹たち女性筆記者がそうであったように、女性が労働の現場に参入する際に〈性的身体〉としてまなざされる可能性に常に晒されていることを考慮するならば、[29] 〈書く機械〉であるということは、男性原理の幻想に身を晒しながらも〈性的身体〉に絡め取られていくことを回避し、〈労働する身体〉として自らを主体化しようと試みる戦略的

な自称であるとも読み取れる。現に、伊吹は「「書く機械」として完璧に仕事を遂行出来るかと、いつもそれのみに腐心しきっていい」（一七二頁）たと述べ、「先生は私を「可愛がって」傍に置かれたのではない、仕事に必要だったのだ」（九九頁）と反駁することで、女性蔑視に基づく評価構造のなかで作り上げられてきた筆記者の形象から距離を取ろうと試みている。

しかし、労働する身体として主体化を図ることは、必ずしも伊吹の立場を安定させる方向に働いたのではない。彼女は同時に次のようにも述べている。

それにしても、『瘋癲老人日記』の筆記の間、いつもよりさらに激しく先生をイライラさせたのは何だったのだろうか。当時は、嶋中社長が言われる通り、単なる先生の気紛れで、私としては給料を貰っている以上、社命に従わねばならないと思って行動していたのであったが、もしかすると、私が全くの先生の右手、意思を持たない機械、言わば一種のワード・プロセッサーになりきろうと努力していたことが、ここへ来ていっそう先生の気持ちを逆撫ですることになっていたのかも知れない。（三五二頁）

ここで伊吹は、谷崎との間に度々軋轢が生じていたこと（現に突然解雇を言い渡され、数日後に呼び戻された挿話も記されている）を認めたうえで、自身が〈書く機械〉であろうとしたことが、かえって「先生の気持ちを逆撫で」する事態を招いていたのではないかと述懐している。〈書く機械〉であるとは、私情を挟まず原稿筆記に忠実に徹する態度の謂だが、筆記者に「情緒的な慰め」を期待していた谷崎にとってそれは時に窮屈であり、その苛立ちの矛先が他でもない伊吹自身に向けられたわけである。しかしながら、そうしたジレンマに直面していたのは伊吹だけではない。谷崎もまた、ままならない筆記者との関係に翻弄されていた。「自分の目の前で機械になりきれるのが、私しかいないことへの悔しさから、先生自身にはどうしようもない、不当な苛立ちに身を揉んでおられたのではなかろうか」（三五三頁）と谷崎の内面を推し量りつつ、「先生の文学の誕生には、結局私しか役立つ者がいないことに、先生も気付いておられる、という妙な自信が生れていた」（三五四頁）と語る伊吹の言葉からは、筆記者としての確固たる自負が読み取れる。谷崎の「苛立ち」は、〈書く機械〉として仕事を遂行する有能な筆記者を前にして、彼女が既に自身の欲望を一方的に投影できる存在ではないことを自覚したことから生じたものだといえるだろう。伊吹の筆記者としての矜持が芽生えたことで、ようやく口述者に対して対等に向き合う筆記者の立ち位置を確保することが可能となったのだ。もちろん、伊吹個人が著した回想

記であるというテクストの性格に鑑みれば、実際に伊吹と谷崎とのパワーバランスがいかなるものであったのか、伊吹が抱く筆記者としての自負や誇りにどれほどの信憑性が担保されているのかを客観的に判断することは難しい。口述筆記の現場と回想記の執筆との間に短くない時間の経過が伴っている以上、その語りに何らかの加工や恣意が含まれることは必然である。しかし、こうした問題を念頭に置いたうえで、それでもなお伊吹が過去の口述筆記の経験を、筆記者の能力や資質を不当に評価する状況への対抗的文脈で語っていることは、慎重に受けとめるべきだろう。伊吹は自己の有能性を〈書く機械〉になるという言葉を用いて定義することで、筆記者の役割を矮小化する評価構造への抵抗を試みている。「書斎の中での先生と私とは、原稿を中に、いわば真剣の刃をかざして対峙していたのだ、ある時は先生を扶けて共通の何物かと戦い、ある時は丁々発止と斬り結んでいたのだ」（九九頁）という言葉には、〈書く機械〉という一見従属的な立場を引き受けることで、口述者と対等に渡り合おうとした伊吹の葛藤の痕跡が確かに刻み込まれている。

4．アイデンティティの構築と承認をめぐる境界

ケアの論理が目指すのは、既存のジェンダー秩序がもたらす抑圧や搾取の構造を批判的に検証することだけではない。それは、これまで依存する主体に付与されてきた否定的な意味を組み替え、依存や配慮を基層とする新たな関係性の回路を模索していくためのしなやかな思想でもある。ここまで口述筆記を一種のケア労働と位置づけることを通して、筆記者を不可視化する文学場の評価構造の問題を検討してきたが、最後に口述者と筆記者との関わりを〈ケアを受ける者とケアする者〉と捉え直すことで、両者の間に単なる支配関係とは別種の関わりが看取できることを確認しておきたい。

ディスアビリティ・スタディーズの領野に目を向ければ、ケアする者としての介助者は「一人一人の「障害」の在り方の違う「障害者」それぞれの「障害」に慣れ親しみながら」その「非対称的な相互身体性を引き受け」る役目を果たしているのだという。[30] 口述筆記の場合も、思考とそれを文字化する手が別の人物に分離されている以上、その「非対称的な相互身体性」から自由になることはできない。他のケア従事者同様、筆記者にはケアを受ける口述者のニーズを適切に汲み取り、声を文字に転化する間接的なプロセスが抱え込む「ずれ」にその都度対応することが求められる。ここから明らかなのは、口述者と筆記者の関わりを単純に主体とそれに従属する道具の図式に擬えることはできないという点だ。その意味で、後藤吉彦が介助者手足論をサイボーグ身体の形

成へと大胆に読み替えていることは示唆に富む。後藤は、「「介助者手足」をあえて字義どおり「介助者が障害者の手足になること」と読んでみ」ることを提起し、「介助をともなう動作の最中において、障害者と介助者の身体」の「境界が侵犯されている」状況に目を向けることで、「一つの動作のなかで二つの身体がつながり、「サイボーグ身体」が形成されていると（も）みることができる」と指摘している。[31] ダナ・ハラウェイが「サイボーグ宣言」のなかで機械と生体が融合するハイブリッドな身体イメージを提示し、そこに西欧中心主義・男性中心主義に基づくあらゆる二項対立を脱構築する潜勢力を見出したことはよく知られている。後藤は、サイボーグの身体が能動的／受動的、主体／客体など階層支配的な秩序によって規定されている境界を侵犯することで、そうしたヒエラルキー自体を解体する可能性を有している点に着目している。そして、それをケアの現場における身体のあり方に援用することで、ケアを受ける者（主）とケアする者（従）との関係を再構築しようと試みているのだ。

ケアの現場に立ち上がる身体の相互的な関係性が、二元論的カテゴリーを切り分ける境界線の再編に結びつくという指摘は、とりわけ重要である。ここで、伊吹の〈書く機械〉になるという自己認識に再び立ち返ってみたい。彼女は自分が〈書く機械〉であることの意味を、以下の点にも見出している。

> しかも、『瘋癲老人日記』の内容は、かなり刺激的な個所が多い。先生はひそかに、私が性的な表現に戸惑うことを期待しておられたのかも知れない。しかし、そこで私が一かけらでも私的な情緒をさし挟んだら、原稿筆記は成り立たない。一瞬たりとも書き手が機械でなくなったら、先生は作家ではなくなり、わがまま放題のただの老人になってしまわれるに違いなかったのである。（三五三頁）

前節で確認したように、伊吹が〈書く機械〉であろうと務めるのは、性的な搾取を逃れ、口述筆記の現場で〈労働する身体〉を獲得するための抵抗の構えであった。しかし、それは筆記者である伊吹の立ち位置を左右するだけではない。注目すべきは「一瞬たりとも書き手が機械でなくなったら、先生は作家ではなくなり、わがまま放題のただの老人になってしまわれるに違いなかった」という一文である。つまり、伊吹の筆記者としての振る舞い自体が、谷崎を「わがまま放題のただの老人」と「小説家」とに分かつ〈境界線〉を形成しているのだ。当然だが、「小説家」というアイデンティティは先天的に付与されるものではない。小説家は、小説を書くことによってはじめて小説家となる。だとするならば、書く力を物理的に奪われた小説家にとって、筆記者との依存関係は自己形成と切り離せない重要な価値を帯びるものとなるだろう。

もちろん、このことに谷崎自身が自覚的であったとは言い難い。したがって、谷崎と伊吹の相互依存性を過度に強調することは、両者の関係を理想化し、そこに埋め込まれた権力性や階層性を温存してしまうことにもつながりかねない。しかしながら、一方で伊吹の認識を単なる独りよがりの私見と一蹴してしまうこともまた避けなければならないだろう。彼女が敏感に察知した相互依存性は、主従の桎梏を乗り越え、口述筆記を口述者と筆記者双方におけるアイデンティティの構築と承認の場として捉えることで、その関係の質を転換させる可能性を示唆している。

〈書く機械〉として伊吹が口述筆記の現場に参画することは、谷崎が〈小説家になる〉という生成変化と表裏一体の関係として立ち上がるものであった。外在するものとの関係性のなかで主体のありようが編み直されていく様に目を向けることは、主客二元論に基づく固定化した関係では把捉しきれない、ケアする者とケアされる者との相互応答性へと両者の関係性を開いていくことを可能にする。それは、支配や抑圧といった紋切り型の言葉で表象されざるをえなかった口述者と筆記者との関係性に風穴を開け、依存というケアの実践に根ざした関係性の語り方を志向するものである。繰り返しになるが、作家における公的領域と私的領域の境界線、そして口述筆記の現場における小説制作（公）とケア労働（私）の境界線は決して確定可能なものではない。それは常に曖昧かつ不安定であり、その可変性ゆえに女性筆記者の不可視化が生じることはこれまで見てきた通りである。しかし、口述筆記というケアの営みは口述者と筆記者との依存関係によって、この境界線の揺らぎを両者の生成変化の過程へと接合させる有効な視角を与えてくれる。ハラウェイは次のようにも述べる。

> 境界は、さまざまなマッピングの実践によって描き出されるのであって、「対象」がそれ自体であらかじめ存在しているわけではない。対象とは、境界をめぐるプロジェクトである。しかし、境界は、その内部から移動する――境界は、このうえなくトリッキーなのである。境界が暫定的に内包しているものこそ、生成的でありつづけ、さまざまな意味や身体／生体を生産しうるような存在でありつづける。境界を特定の位置に定め（siting）、境界に照準を合わせる（sighting）作業は、リスクをはらんだ実践である。[82]

伊吹の言に倣えば、口述筆記とは口述者と筆記者とが「真剣の刃をかざして対峙」することを通して、公／私の境界線をその内部から引き直し、「わがまま放題のただの老人」（私）と「小説家」（公）との微細だが極めて重要な差異を生成しつづける営みに他ならなかったのではないか。そしてそれは、伊吹にとっても、公／

私の狭間における筆記者としての承認をかけた〈危うい実践〉であったに違いないのである。

5．おわりに

本稿では、口述筆記創作におけるジェンダー構成に着目し、女性筆記者の振る舞いをケアの論理と接続させて分析することで、近代作家を取り巻くケア労働の問題の一端を明らかにした。作家という職業における公的領域と私的領域の境界確定が極めて曖昧なものであることに伴い、口述筆記も公私両面の性質を帯びた営為として位置づけられる。とりわけ女性筆記者は、公私の区分が都合よく持ち込まれる過程で文学場の評価構造から取りこぼされ、その存在が不可視化されるという、ケア労働が公的領域から排除されていくのと同様の構図を見て取ることができた。また、谷崎潤一郎の筆記者を務めた伊吹和子の回想記の記述を導きに、口述筆記の現場に生じる摩擦や軋轢に対して彼女がどのように抵抗していったのか、口述者と筆記者との関係性をケアと依存の論脈に配置することで、いかにその固定的な図式を組み替えることが可能なのかを考察した。

本稿では伊吹の筆記者としての経験を具体的事例の中心に取り上げたが、それは決して彼女の経験を口述筆記に従事した女性たちに共通するものとして普遍化したり、女性筆記者と男性作家との関係性を一枚岩に包括したりすることを意図するものではない。[33] 谷崎と伊吹の他にも、武田泰淳と武田百合子や上林暁と徳廣陸子の事例など、男性作家の口述筆記に周囲の女性が筆記者として関わるケースは複数存在する。それぞれの事例に固有の経験が存在し、そこでは如上の関係性とは異なる場が構築されているはずである。紙幅の都合上、ここではこうしたすべての事例に目配りすることはできないが、これまで看過されてきた口述筆記者の関わりをケア労働として可視化する試みの端緒として本稿を位置づけたい。

近年、芸術社会学の分野でも、芸術制作をめぐるケア労働の問題には大きな注目が集まっている。[34] 本稿は、小説というテクスト生産の場においてジェンダーの階層秩序と絡んだ形で生じる抑圧構造に焦点を当てたが、それは広く芸術制作の分野で周縁化されてきた感情労働・ケア労働の担い手たちの参与をどのように掬い取ることが可能かという点にも接続しうる。これは公と私の区分が流動的な芸術活動において、何を労働として認知し、価値づけていくかという問題にも関わるだろう。小説を書くという行為は決して自律した主体によってのみ為されるのではない。それをサポートする労働があることを認識し、書けない作家を介助する口述筆記者の事例からテクスト生産の現場を照射することの意義は

ここにあると考えられる。

注

（1）ジゼル・サピロ著、鈴木智之・松下優一訳『文学社会学とはなにか』世界思想社、二〇一七年（原著二〇一四年）。

（2）松澤和宏『生成論の探求』名古屋大学出版会、二〇〇三年、五頁。

（3）例えば太宰治がおこなった口述筆記について、三浦雅士は「太宰治は落語家であると述べた。むろん、ひとつの視点にすぎない。だが、この視点に立つとそれなりに見えてくることがいくつかある。たとえば口語と文語の混淆がそうだ。語ること、朗読することを好んだ太宰治の文章には、特有なリズムがあって、そのリズムが口語と文語の混淆を可能にするのである」（『青春の終焉』講談社、二〇一二年、二三七頁）と指摘し、そこに口語と文語が混交する文体を作り上げるための戦略的な意識が底流していたことを明らかにしている。

（4）ケアが包摂する概念については、エヴァ・フェダー・キテイ著、岡野八代・牟田和恵監訳『愛の労働あるいは依存とケアの正義論』（白澤社、二〇一〇年、原著一九九九年）や岡野八代『フェミニズムの政治学――ケアの倫理をグローバル社会へ』（みすず書房、二〇一二年）における定義を参照した。

（5）近年のケア論に関する研究成果は、いずれも現代社会に浸潤しているネオリベラリズムの政治に対する対抗的な思想として積み重ねられている。主なものに、ファビエンヌ・ブルジェール著、原山哲・山下りえ子訳『ケアの倫理――ネオリベラリズムへの反論』（白水社、二〇一四年、原著二〇一一年）や佐々木亜紀子・光石亜由美・米村みゆき編『ケアを描く――育児と介護の現代小説』（七月社、二〇一九年）などが挙げられる。

（6）例えば、谷崎潤一郎の口述筆記の経験がいかに創作実践に折り返されているのかという問題については、しばしば晩年の作品において前景化する性的不能の主題との関わりにおいて意味づけられてきた。渡部直己や東郷克美は、ペンに象徴される男性の権力性の喪失経験を作中における性的不能のモチーフに重ねつつ、谷崎の晩年の作品群が手記や日記といったドキュメント形式をテクストの枠組みとしていることに、エクリチュールへの固執といった反動的な意識が胚胎していることを読み取っている。性的不能という主題の地平において、書けない作家の実体験と創作実践の両者を接続させる批評言説は、ペン＝書くことに中心化された権力性から男性作家を放擲すると見せかけ、その実ジェンダーの支配構造に基づいたセクシュアルなレトリックを呼び込むことで、書くことをめぐる男性中心的な文脈を強化することに加担しているといえる。

（7）近代資本制社会における女性抑圧構造については、上野千鶴子『家父長制と資本制――マルクス主義フェミニズムの地平』（岩波書店、二〇〇九年）などに詳しい。

（8）小説家が職業として成立する過程については、明治四〇年代に自然主義の言説が中心となって文学という領域の〈職業〉化を編成していく様を分析した飯田祐子「「作家」という職業　女性読者の抽象的排除」（『彼らの物語　日本近代文学とジェンダー』名古屋大学出版会、一九九八年、七四―一〇四頁）や、大正期から昭和初期を射程に文学者をめぐる歴史的コンテクストを掘り起こすことで、そのイメージの成立過程を論じた山本芳明『文学者はつくられる』（ひつじ書房、二〇〇〇年）などがある。

（9）例えば、「昼食時に、みな子は食べた物を吐いてしまう。一ヶ月以上無事だったのにまた逆戻りかと、いささかがっかり。一日中身体全体の調子がおかしいと言っている。口述で書いた原稿を読んで聞かせる。助詞を一つ間違えて読み上げると、読み終えた後で的確にそこの場所を直すように要求する。何日も前の口述だから、おおかたは忘れているだろう

と思うのに、その辺をぴしゃりと言うのにはいささか感心する」などの記述がみられる（大庭利雄『終わりの蜜月――大庭みな子の介護日誌』新潮社、二〇〇二年、一九〇頁）。

（10）「毎日みな子を着替えさせたり、トイレに付き合い、下の物を始末し、風呂に入れたり、ふつうの生活なら夫婦の間でも任せないようなことをしていると、男と女の関係とは違った二人の関係が出来上がるようだ。どんなに夫婦として長く親しんでも、互いに相手の領域には足を踏み入れない遠慮のようなものがあるものだが、こうして介護の生活に入ると、彼女はすべてを利雄に任せて頼りきり、利雄はまた彼女を一人の傷ついた人間として扱ううちに、これは単なる夫婦や男女の関係ではなく完全に同体化してしまった感がある」（大庭利雄前掲書、一六七頁）。

（11）三浦綾子・三浦光世「書くことはあっても、書く身体がないんです――妻77歳、夫75歳の支えあい」、『婦人公論』第八四巻第二〇号、中央公論新社、一九九九年一〇月、八頁。

（12）谷崎潤一郎「雪後庵夜話」（初出は『中央公論』一九六三年六月号～九月号）。引用は『谷崎潤一郎全集』第二四巻、中央公論新社、二〇一六年三月、三六二頁に拠る。

（13）伊吹和子『われよりほかに』講談社、一九九四年、三五六頁。

（14）例えば次のような記事が挙げられる。「毛糸の手甲をはめた右手をさすりながら、〝梅雨になると痛むんです。欧米ではタイプライターを使って原稿を書いているが、なにか特別の仕掛けをして書けないものかな〟と笑う。ものを書く人の手が不自由ということのつらさ、この手は一昨年十一月末に東京の宿舎で揮毫中、高血圧症で倒れてから悪くなったもので、血管ケイレンの症状がまだ残っている」（「老いてますますさかん」、『毎日新聞』一九六〇年七月二五日夕刊）。「谷崎氏は昭和三十三年の十一月以来、右手の痛みで筆がとれなくなった。長年の執筆が原因で、それ以降は口述筆記の創作がつづいている。一切を文章に打ちこみ、一字一字大きく、力強くマス目を埋めてゆくこの作家に、これ以上の心痛はなかったはずである。こうした肉体的苦痛の中で、いま新々訳になる「谷崎源氏」の完成が近づいている。」（「肉体的苦痛にたえて」、『読売新聞』一九六五年四月二三日夕刊）。また時には「太い万年筆で大きい字で書いてもらうんですよ。うまい字でなくていいから、略字なんかでなくキチンとした字で。これできる人いませんでねえ。いてもなかなかつづきませんねえ」（「現代の文人　谷崎潤一郎」、『読売新聞』一九六三年一二月一四日夕刊）という谷崎の口述筆記者に対する不満が掲載された記事も見受けられる。

（15）伊吹和子前掲書、九―一〇頁。

（16）初出は、『東京新聞（夕刊）』一九八九年八月二一日～一九九三年一〇月一三日。原題は「文豪の日々」。

（17）例えば、沢木耕太郎「口述筆記の秘書が見た作家・妻・作品」（『朝日新聞』一九九四年三月一三日朝刊）や富士川義之「『われよりほかに』伊吹和子著　口述筆記者が見た〝真の谷崎〟」（『読売新聞』一九九四年三月二八日朝刊）等の見出しが挙げられる。

（18）伊吹は『われよりほかに』の「あとがき」で「私の履歴は、何かといえば未だに「もと中央公論社に勤務した編集者」とは言われずに、「谷崎先生の秘書だった人」と言われることが、常なのである」（五一五頁）と、自身のキャリアと周囲の認識との落差が大きかったことに言及している。

（19）伊吹和子『われよりほかに』講談社、一九九四年、一六七頁。

（20）アーリー・ホックシールド著、石川准・室伏亜希訳『管理される心――感情が商品になるとき』（世界思想社、二〇〇〇年、原著一九八三年）参照。

（21）伊吹は「何もかも、先生の虫の居所に合わせなければならないのだと悟ってからも、見当違いばかりやらかしていたようである。（中略）何に限らず、ごく些細なことでも、し足りないと思われるとどうも親切心がないということになり、煩わしいと思われると出しゃばり過ぎるという

ことになって、あなたはいつもこうだねとおっしゃる。けれども何も言われないと、し足りないのを歯痒く思いながら我慢していて下さるのか、うるさいなあと思いながら黙って怒っておられるのか手応えがなくて、心配は募る一方だし、叱られたら叱られたでうろうろしてしまう」（伊吹前掲書、一六六―一六七頁）とその負担を吐露している。

（22）新田啓子「家内労働者という種族――生の境界とヘンリー・ジェイムズ」、日比野啓・下河辺美知子編著『アメリカン・レイバー　合衆国における労働の文化表象』彩流社、二〇一七年、二三六頁。

（23）伊吹前掲書、一六五―一六六頁。

（24）伊吹の証言によれば、谷崎は口述筆記を口述とは呼ばず、必ず「口で授ける＝口授」という言葉を使用していたと言う（伊吹前掲書、二一頁）。口述者と筆記者との関係に水平性が保たれている訳ではなく、あくまで一方的・支配的なニュアンスを含意する「口授」という言葉を谷崎が用いていたことは、口述筆記に対する谷崎の意識を看取するうえでも重要である。

（25）ジョアナ・ラスはいかに女性の書いたものが正当な評価を受けず闇に葬られるかを類型化して整理し、女性の表現者に対する社会的な抑圧構造を〈テクスチュアル・ハラスメント〉という概念を用いて明らかにしたが（ジョアナ・ラス著、小谷真理編訳『テクスチュアル・ハラスメント』インスクリプト、二〇〇一年、原著一九八三年）、こうした誹謗中傷も〈テクスチュアル・ハラスメント〉の常套手段の一つと考えられる。

（26）伊吹前掲書、九八頁。

（27）伊吹前掲書、一七一―一七二頁。

（28）このことは谷崎が自身の日記で口述筆記者を務める女性を「お嫁さん」と称していることによっても裏打ちされる。（谷崎潤一郎「自由日記」一九五九年二月一日～同年一〇月二四日。引用は『谷崎潤一郎全集』第二六巻、中央公論新社、二〇一七年六月に拠る。）

（29）金井淑子はこの点について「「性的身体」に定義される女性が「労働」のなかで「完全参加」しようとすれば、当然「性的存在」である部分を全く切り捨てるか、あるいはみない仕掛けにして「労働する身体」になりきるための努力をするしかない」と指摘している（「〝自立の迷走〟からのフェミニズムの自立のために――自立論再考・「女性の身体性」をキーワードに」小倉利丸・大橋由香子編著『働く／働かないフェミニズム　家事労働と賃労働の呪縛?!』青弓社、一九九一年、五一頁）。

（30）小倉虫太郎「私は、如何にして〈介助者〉となったか?」、『現代思想』第二六巻第二号、青土社、一九九八年二月、一九〇―一九一頁。

（31）後藤吉彦『身体の社会学のブレークスルー――差異の政治から普遍性の政治へ』生活書院、二〇〇七年、一八七頁。

（32）ダナ・ハラウェイ著、高橋さきの訳『猿と女とサイボーグ　自然の再発明』青土社、二〇〇〇年（原著一九九一年）、三八六頁。

（33）もちろん、谷崎の口述筆記に関わっていたのも伊吹和子ただ一人ではない。伊吹のように秘書兼口述筆記者として雇用されていた人物はもちろんのこと、義妹の息子の妻であった渡辺千萬子をはじめとする家族がその役目を務めるなど、周囲の複数の女性たちが谷崎の筆記に携わっていた。特筆すべきは、谷崎家に女中として雇われていた女性たちもこれに関わっている点である。彼女たちはもともと家事労働者として谷崎家に入り、筆記者として流用される形で口述筆記の現場に足を踏み入れた女性たちだった。同じ口述筆記に関わる者であっても、正式に中央公論社と雇用契約が結ばれ、報酬を得ていた伊吹と家事労働者たちの立場は異なる。伊吹のように能力資源や公的な筆記者としての肩書きを拠り所にすることができなかった筆記者たちの関与の実態については、別稿を期したい。

（34）吉澤やよい『芸術は社会を変えるか?・文化生産の社会学からの接近』青弓社、二〇一一年、二一四頁。